芸術がもたらす地方の経済

経済学部　経済システム課程

総合政策コース

　　三宅　加那子

≪もくじ≫

はじめに

１章　どうして「芸術から」なのか

１－１　芸術から人へ

１－２　人から人へ

１－３　人から経済へ

２章　そもそも芸術とは何か

２－１　芸術家は何を目的にそれをつくったか

　２－２　芸術がない町に魅力を感じるか

３章　芸術がもたらす力

　１－１　文化力に取り組む地方行政

　１－２　地域住民と民間企業

おわりに

参考文献

**はじめに**

　美術館には、県立や私立、近代、現代美術館などがある。美術館と言うと硬いところと構えてしまいがちであるが、今日においてみられるのは、美術館というハコの中に納まった絵画を見るだけではなく、訪れた者が自ら体験できるような、ミュージアムが目立つ。

　日々の生活から少し離れた空間であり、また、空間の制限をなくすことでアーティストの表現に自由をもたらした。芸術に触れることに距離を置くことなく、そこにある空間そのものをアートとし、市民やアーティストがその地と一体となってまちをつくっていこうとする動きは、個々人にとっても、また、その地域においても、よい効果を生むのではないだろうかと思った。

　そもそも、私がそのような考えに至った経緯には、もともと芸術分野に興味があったことは言うまでもないのだが、大学1年生の時に行った海外語学研修が関わる。私が、6週間オーストラリアへ行った時のことだ。ちょうど、私の生活する同じ都市に、母の友人が住んでおり、私は休日に訪れた。その時期に、インヴァーロックという地域ではジャズの音楽祭をしているということで連れて行ってもらった。そこでは、町一帯がジャズ一色といっても過言ではなく、あちらこちらの建物、路上、テントの中と、さまざまな場所で音楽が鳴り響いていた。私たちは3、4日インヴァロックで滞在した。一軒家を借りて。私が驚いたのは、「こっちの人たちはみんな、こうやって休日を楽しんでいるのよ。」という彼女の言葉であった。みんなではないだろうと思ったが、大概が休日になればどこかへ出かけ、ホテルではなく一軒家に宿泊するそうだ。そういえば、お店の開店時間は遅く閉店時間は早く、家族との時間を大切にし、休日は自分たちの趣味のために使う。日本との時間の使い方の差に、衝撃をうけた。ゆとりとはこういうことかとも思った。身近にアートを感じることができるようになれば、人々のココロにもゆとりを生みだすことができるような気がする。カローシという言葉が世界で通じるようになった今日の日本は、何のためにそこまで働くのか。趣味を仕事に、という言葉もまた日本人らしい考え方である。芸術にふれることで、人々の心に与える豊かさで個人が良くなれば、経済効果があがるとするならば、芸術がもたらすものは、その個々人のライフスタイルに繋がり、地方の経済をつくっていくように思う。

　日本人の休日の過ごし方には、一人で過ごす場合、インターネットやメールが全体の8割を占め、次いで日頃出来ない家事や録り溜めたテレビを見るなどといった、お金を消費しないものが挙げられる。これは、不景気の今日において、貯金するためであるという、現代人の知恵だとも言われている。そして、普段からよく働いているため、せっかくの休日は自分のために使いたいという意見が多いようである。

日本人の人間性が、芸術に興味を持たない生き物ではないだろう。日本には四季もあり、感性豊かであると思う。しかしながら、上記で述べたように、余暇時間を家庭内で過ごすだけでは、今後の日本人は益々芸術に興味を示さなくなるのではないだろうか。そこに気付いてか偶然か、行政も国を上げて国民の文化力を高めようとしている。様々な角度において、芸術の持つ力が人々に与える力は、何か特別なものがあるような気がしたので、「芸術がもたらす地方の経済」を卒業論文のキーワードにした。

**１章　どうして「芸術から」なのか**

**１－１　芸術から人へ**

必ずしも芸術が直結して経済効果をもたらすものではない。その間には人が存在するということが欠かせない。では、芸術が人へもたらす効果とはどのようなものか。精神医学では「ａｒｔ ｔｈｅｒａｐｙ」という言葉があり、本来は絵画を手段とした治療法のことをいう。しかし、日本語では「芸術療法」と訳され、治療手段として用いる芸術活動は、絵画のほか、コラージュ（はり絵）、彫刻、陶芸、箱庭、音楽、舞踏、手芸、写真、書道、詩歌など、その範囲を広げている。芸術療法は、レクリエーションの一環として行われるもの、自己表現のみを目的とするもの、作品を媒体にして精神療法を行うものの３つに分類することができる。通常の精神療法が言葉を用いて行うのに対して、芸術療法では、言葉では表現しにくい心の問題を、芸術活動という非言語的な表現を通して扱う。芸術療法の効果は通常の精神療法と重なる部分があるが、芸術療法特有の効果としては、失われた人間らしい感覚を取り戻すリハビリテーション効果、受け入れ難い気持ちを浄化させるカタルシス効果、日常生活に楽しみを与えるレクリエーション効果などがあげられる。

アートセラピーとは、自分を表現することで気持ちを発散させ、楽しくなることをいう。芸術が人に与える効果と言うのは、日頃から芸術に触れる機会が少ない分、アートに触れるということ自体が日常からの解放（一種の現実逃避）に繋がると言える。気持ちを新鮮にさせる効果があるという意味で、アートセラピーに近いものがあると言える。人は芸術という手段を使って快楽を求めている。

**１－２　人から人へ**

　人は、芸術という手段を使って快楽を求めている。そして、国（行政）は、芸術という手段を使って、国民の文化力を高めようとしている。この双方の自然のマッチが生まれるということは、地域が活性しやすい方向へと持っていきやすい。なぜならば、市民の文化力が高まれば、プロジェクトや芸術イベントの成功が促されるからだ。文化とは、趣味・娯楽だけのものではなく、日常に根付くアートが、原動力となる市民の心を動かす。それは、同時に芸術に対して理解のある環境になることを示すのである。

　行政の動きとして、文化庁は各地域の「文化力」（文化の持つ、人々に元気を与え地域社会を活性化させて、魅力ある社会づくりを推進する力）を盛り上げ、社会全体を元気にしていくためのプロジェクトを、各地域の関係者と協働して推進している。現在は、7つ（地域別に関西、丸の内、九州・沖縄、霞が関の4つと、テーマ別に修理現場、市民、発掘現場の3つ）を展開している。それぞれのプロジェクトにおいて、「文化力」ロゴマークやホームページを活用した広報活動など、「文化力」を発信するための取り組みを幅広く展開しているようだ。

　岡本太郎氏の「明日の神話」という作品は、渋谷のJR線と京王井の頭線を結ぶマークシティ内の連絡通路に恒久設置されている。「明日の神話」というのは、岡本太郎がメキシコの実業家から「新築ホテルのロビーを飾るための壁画を描いてほしい」という依頼を受けて描いたものだ。しかし、依頼主の経営状況が悪化したことでホテルは未完成のまま放置されることになり、「明日の神話」もロビーから取り外されて行方不明になっていた。永らく行方がわからなくなっていたが、2003年9月、メキシコシティ郊外の資材置き場で、『明日の神話』が発見された。なぜ、連絡通路に縦5.5m横30mという巨大な作品を設置したのか。文化庁は、「国民の心を一層豊かにし、我が国の「文化力」を高めていくためには、国民が芸術作品を鑑賞する機会を提供することが、大変重要です。文化庁におきましても、文化芸術振興基本法に基づいて、様々な取組を推進しているところでありますが、優れた芸術作品を鑑賞する機会を提供していくためには、文化芸術団体をはじめ、関係する自治体や企業の広範な協力が必要不可欠です。」と述べる。つまり、芸術作品が広く国民に鑑賞され、我が国の文化の発展に役立てることを祈念するということだ。岡本太郎の「ピカソを超える」という目標からも伺えるような、「明日の神話」という大きな作品を公共性のあるものにすることで、市民の文化力を上げようとしているのである。

上の写真からも分かるように、とてつもなく大きい作品であることがわかる。市民は毎日、この連絡通路を通るたびに、何の気なしにこの作品に触れるのである。多くの人々が行き交うこの場所で、まじまじと作品を見ることはないかもしれない。しかし、自然に人々のなかに根付くアートという存在が、芸術の垣根をフラットにしているといえるだろう。また、この「明日の神話」というのは、第五福竜丸（遠洋マグロ漁船）が被爆した際の水爆の炸裂の瞬間をテーマにしたものであり、３．１１の東北大震災以後、人々に与える見方も変わっていったのではないかと思う。現に、落書きされるという問題が起こっており、福島の原発事故をイメージした、原子炉建屋が４つ描かれたという。



　このように、芸術作品が日常の物議をかもしだすということは、それだけの関心を集めていると言ってもいいだろう。作品自体の善し悪しではなく、原発問題云々でもなく、賛否両論なにかしらの意見が交わされることは、少なからず良いことだと思う。感じること、考えることをやめたら、人はただの人形である。生きるための手段の一つとして、芸術に触れることが人に大きく関わるのであると思う。

**１－３　人から経済へ**

　経済とは一般的に、人間の共同生活の基礎をなす財・サービスの生産・分配・消費の行為・過程、並びにそれを通じて形成される人と人との社会関係の総体（広辞苑　第五版）のことである。私がここで述べる経済は、何か商品を買うことで直接的にその売上がどうだということではない。芸術に興味をもち、芸術にふれることで満たされた人々が増えればどうなるかということである。行動主義心理学から言えば、多くの行動主義者に共通する1つの仮説は、“自由意思は錯覚であり、行動は遺伝と環境の両因子の組み合わせによって決定されていく”というものである。私の考える一連の流れは、興味→情報収集→行動→体験→満足→評価である。人は関心のある商品（必ずしも製品ではない）であれば、購買意欲がなくても情報検索を継続的に行う。この時点ですでに、心の豊かさは指数に現れる。次に、情報収集・分析が済んだら、行動（移動）手段を選ぶ。そして訪れ、評価に入り、「また来たい」であったり、「来て良かった」と思えば、その評価は第三者へと広がるのである。いわゆる口コミと言うのは、人々の満足度が電波となるのだ。この、評価で満足が得られなければ、忠実な顧客とはなりえない。満足させても、積極的にリレーションシップを結ぶ努力をしなければ、客は他に流れてしまう。同じような商品が市場に溢れていることを忘れてはならない。顧客に満足を与えるとともに、顧客維持の努力も重要なのだ。ある地点へ訪れるまでの費用、そこでの入館ないし体験料、泊るのであれば宿泊料、そして人が集まるところに人は集まりその地域は活性される。人は気持ちが高揚すれば購買意欲も高まるため、心が満たされれば財布のヒモは緩むのである。

　これら、芸術・人・経済という３つのキーワードは、全く別の意味を持ちながら、私たちの生活に深く連鎖しているのである。そしてこの芸術こそが、人間形成の大部分を占め、経済を動かしていると言っても過言ではないのである。

**２章　そもそも芸術とは何か**

　芸術とは、一般的に、一定の材料・技術・様式を駆使して、美的価値を創造・表現しようとする人間の活動およびその所産であり、とりわけ表現者側の活動として掴まれる側面が強く、その場合、表現者が鑑賞者に働きかけるためにとった手段、媒体、対象などの作品やその過程を芸術と呼ぶ。表現者が鑑賞者に伝えようとする内容は、信念、思想、感覚、感情など様々であるとされる。

**２－１　芸術家は何を目的にそれをつくったか**

　例にマルセル・デュシャンという美術家を挙げよう。既成の物をそのまま、あるいは若干手を加えただけのものをオブジェとして提示した「レディ・メイド」が数多くある。その中でもよく知られているのが、普通の男子用小便器に「泉」というタイトルを付けた作品だ。

[](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Duchamp_Fountaine.jpg)現代美術の先駆者とも言える彼の「みるものが芸術をつくる」という考え方を端的に示したものであるといえる。芸術に関する価値観は人それぞれだ。作品には一つ一つにその作者からの何か訴えかけたいメッセージが込められている。そのため、ブームのように各地で行われているトリエンナーレなどにおいて、ただ有名だという理由だけで、それぞれの地域へ姿を現すと、そのメッセージも作品の良さも伝わらなくなる。見る者に何かしらの思いを伝えることが出来ないだけでなく、訪れた者自体も「なぜ、自分は今ここにいるのか」という疑問を抱いてしまうかもしれない。そうなってしまうと、トリエンナーレの開催目的は全くして伝わらず、市民の文化力向上という意味でも成功したと言えなくなるだろう。「芸術祭を開催しました、けれども、終わってみると何も残っていませんでした。」では、ただのお祭騒ぎである。幸いというのか、トリエンナーレというものは3年に1度開催される。そのためただ一度きりで終わるのではなく、次にどう活かすかが常に課題になる。試行錯誤を繰り返し、表現者と作品と観賞者が一体になるところを模索し続けることで、ブームとなっている各地の芸術祭は、徐々にその地域色を色付けていくことになるのである。

[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=12q4haj98/EXP=1322386785;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjUktHZU13SVhoZ2xTSEp4REtZR1JqSVFXVGhkTDFxa3ZrN3JkdFh3ZTdDS3ltd3VXemh6djZrMGpvBHADYjJ0aGJXOTBieUIwWVhKdgRwb3MDNARzZWMDc2h3BHNsawNyaQ--/*-http:/www.aoyama-omotesando.com/img/okamoto-taro-taiyonotou-thumb.jpg)　次に、太陽の塔で有名な岡本太郎氏の芸術に対する世界観は、「手先の巧さ、美しさ、心地よさは、芸術の本質とは全く関係がなく、むしろいやったらしさや不快感を含め、見る者を激しく引きつけ圧倒する事こそが真の芸術」と説いている。「芸術は爆発だ」という彼の有名な言葉の中には、このような意味が含まれていたのだ。

[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=12hpvg9lu/EXP=1322387013;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjUTdOVWs5VFVUVEJhaEtydnFQY3JwRktTMTlFLWpldlhWaVNSNVprWFBCTHlHS3hGS05zMkRpd29NBHADYjJ0aGJXOTBieUIwWVhKdgRwb3MDMTcEc2VjA3NodwRzbGsDcmk-/*-http:/farm4.static.flickr.com/3141/2862183786_a23a55e705.jpg)　枠（額縁）にはまった絵画だけが美術作品ではない。十人十色の感じ取り方があるため、いかに、観賞者を魅了させるかが芸術には大切なのである。そして、様々な芸術家たちの考え方や作品に触れることこそが、大切なのである。

**２－２　芸術がない町に魅力を感じるか**

　何度も述べるが、芸術に対する批評は人それぞれである。しかし、それは人々が各々の関心を抱き、興味を持たれたもの（町）であることは間違いない。つまり、みんなが賛否両論注目を抱くほどの話題がそこに集まっているということだ。人は人を集め、人は自然と話題の所へ集まる。「芸術がある町」というのは、それだけの「人の関心がある町」と言えるはずだ。

　芸術がない町というのは存在しないだろう。あらゆるものを芸術と呼ぶことができ、仮にそこに何もなくてもそのこと自体をアートだとも言えてしまうのである。自然の豊かな場所であれば、それは自然が造り出した芸術であると言って守ろうと取り組むだろう。芸術がない町というのは、芸術に関心を持たない町と置き換えることができるだろう。コンクリートジャングルと呼ばれ、人との繋がりが薄いと言われる東京でさえ、ビジネス以外の関心（芸術への関心）も高く、さまざまな芸術やそれらのイベントで溢れている。都内にある美術館を、ざっと数えただけでも58はある。これに、小さなギャラリーなどを合わせれば、その数はきりがないだろう。つまり、芸術に関心を持たない町というのは、人々が興味を持つという感性を失いつつある町であるといえる。大抵の人々は、そのような町に魅力は感じられないはずだ。

また、私たちは、似たものと付き合い、同じであるということに少なからず安心感を抱いて生活しているはずである。そのため私たちは、異文化に触れることで自分たちの文化に気付くことができるのだ。むしろ、異文化に触れなければ違いに気付くことは難しいかもしれない。当たり前であると思っていることこそが、非日常であるということに気付けるからだ。

　そこで、近年のアートブームに見られる国際美術展について述べたい。これは、町おこしの題材としてよく使われている、芸術の祭という手っ取り早い方法である。

[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=15mli4dmc/EXP=1322560319;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjUkVSS3lCVENPTHBlQmM0T2daZUl0VVFmZmxUZ0xIQWlXOExlNDRTbDd4UXlwd1l6d1VWTkFUYklVBHADNDRPVDQ0S280NE96NDRPSzQ0Tzg0NE9zBHBvcwMxMDEEc2VjA3NodwRzbGsDcmk-/*-http:/u.jimdo.com/www35/o/s11268a840c75687b/img/i2b99a085cb92165e/1316336148/std/%E7%A5%9E%E6%88%B8%E3%83%93%E3%82%A8%E3%83%B3%E3%83%8A%E3%83%BC%E3%83%AC2011.jpg)　国際美術展とは、その名の通り、日本だけでなく世界中で行われている芸術の祭典である。国内外問わず様々なアーティストが参加するため注目度は必然と高くなる。しかしながら、全世界で開催されているとだけあり、出品する作家やテーマが似偏よってしまいがちである。そのため、いかにその地域の特性と上手くかけ合わせるかが、成功のカギといえるだろう。多くは普段見ることのできない世界の美術を一堂に集めての美術関係者や住民同士の国際交流が目的であるが、町おこしや観光客の集客、多様な国の多様な芸術に住民が触れることも目的としている。そのこともあり、日本でも各地で盛んに行われている。雑誌の特集に取り上げられ、多くの人の目にとまり、芸術祭はもとより、芸術に関して興味を持つ人々が増えることは、とても好ましい。単に、国際美術展は、地域おこし（経済効果）のための行動のみならず、自然と国民に根付く文化力を高めるという効果を内に秘めた取り組みと言えるのだろう。

[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=12h5ojucg/EXP=1322560109;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjUnJMQ1U2RkZaRm9jVWxERlo1dUxubVkzNlRhem8ycWhjUzFjT3hkUTFjTXg0bzE5ZmVSM2NBWXQwBHADNDRPSTQ0T3E0NEtvNDRPejQ0T0s0NE84NDRPcwRwb3MDNTAEc2VjA3NodwRzbGsDcmk-/*-http:/pds.exblog.jp/pds/1/201101/24/81/d0017381_20542063.jpg)

[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=12lbv9dj5/EXP=1322560032;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjUVBkRUl3dGpXYzE2cV9GZWdBS21NcnFFbjR3NVEzT25vOXVEeng5QmtLS0VpbExSWG45MlJJWC1fNARwAzQ0T0k0NE9xNDRLbzQ0T3o0NE9LNDRPODQ0T3MEcG9zAzE2BHNlYwNzaHcEc2xrA3Jp/*-http:/www.maniado.jp/usrimg/497_a22dfad0c4efdcf16e0d50cb44efe2b8)

　神戸ビエンナーレをみてみよう。ビエンナーレとは、トリエンナーレの３年に１度に対し、２年に１度開催される国際芸術祭のことである。神戸は、古くから陸海交通の要衝として栄え、国際港として世界と交流し、産業を興し、都市の骨格を築き、生活文化を培ってきた町である。特に明治の開港を契機に「文化の翻訳と伝達」の歴史を積み重ね、人・もの・情報の拠点として先駆性、多様性という文化風土を創り上げてきた。また、阪神・淡路大震災からの復興のなかで、人への思いやりの大切さや傷ついた心を癒し、勇気を与えてくれた芸術文化の力を実体験したまちでもある。こうした神戸のまちの歴史・経験を踏まえ、震災10年を機に「神戸文化創生都市宣言」を行い、被災地という枠組みを離れ、芸術文化を活かしていきいきと進化するまちづくりを目指すことを内外に発信してきた。そして、神戸に芸術文化の力を結集して更なる振興を図るとともに、まちの賑わいづくりや活性化につなげるための具体的な取り組みとして、神戸ビエンナーレを開催することになった。

神戸ビエンナーレの特徴は、ビエンナーレやトリエンナーレ形式の現代アートの芸術祭・展覧会は世界に数多く存在する中で、対象とする芸術分野が現代アートだけでなく、生け花や書のような日本の伝統芸術、デザイン、ファッションなど多岐に及ぶ点である。さらには、従来のハイアートの世界では無視されてきた大道芸や児童絵画、洋菓子のデザインなどの現代文化も取り込む試みがされていることだ。この多種多様性は、様々な芸術文化の玄関口となって港町として発展してきた神戸らしさを表現しようとしたものである。次に、広く一般から国際コンペティション形式で作品を選出している点である。これは、世界各国でスターアーティストあるいはキュレーターによるビエンナーレ等が開催されているがその形式にとらわれることなく、若手アーティストの発掘および育成にウエイトを置いたためとされる。

大震災からの復興を機に、人との繋がりやまちづくりをテーマに、「芸術文化のまち」としての新たな一面の地位を築くことでイメージアップをはかり、そこから生まれる経済効果を狙うということ。芸術を使った地域おこし（ここでいう神戸ビエンナーレ）というのは、観光資源の確立において非常に良心的なイメージから入りやすい存在である。というのも、芸術というのは人の心を捉えるものであるからだ。十人十色の答えがあり、視覚からの刺激による非日常の出来事は、個々に自由自在無形の快楽を与える。

数多く存在する中で差別化を図るには、地域色をいかに上手く出せるかがカギとなる中で、「神戸らしさ」をうまく活かせていることに成功の匂いがうかがえる。「成功した」と断定できないのは、２年置きに開催され続けるためである。ただ、成功を数字で置きかえることもできる。２００７年より開催された神戸ビエンナーレは、過去３回、回を増すごとに入場者数が増え続けている。これは、知名度が出てきたこと、人々の関心が向けられていることに繋がる。地域づくりは、まずその地域の人々から始まる。地域愛を育むことで、文化力の向上に繋がり、多岐に及ぶ芸術を地域特性につなげることで、成功へと結び繋がれるのである。芸術＝関心、関心がない＝人に元気がないと置き換えた場合、国際美術展の開催は、そこに住む人々の関心を高め、そうして町を元気にしようという働きがあると言えるのである。

**３章　芸術がもたらす力**

　ここまで述べたところで、文化や芸術は、自然とともに私たちの感性を育み、人生を支える大きな力となるものであるということが分かるだろう。そして、このような芸術という力は、次の世代へと伝えていく必要がある。３章ではそんな地方の文化力の取り組みについて探る。

**３－１　文化力に取り組む地方行政**

長野県では２年ほど前に、文化芸術振興指針というものを掲げた。長野県は、少子高齢化や人口の減少、情報化の進展、交通網の整備による生活圏の拡大など、大きく変化している。また、県民の価値観や生活様式は多様化し、県民は経済的な豊かさばかりでなく、心の豊かさを重視し、自然や文化芸術、健康への志向など、生活の質を大切にする意識が広がっているという。文化芸術は、それ自体が魅力的であることはもちろんのこと、人間として生きていくための基礎的な能力、例えば、創造力や表現力、多様な価値観を理解し尊重する能力などを育てる役割を果たしている。

このような中で文化芸術は、人々に楽しさや感動、精神的な安らぎや生きる喜びをもたらし、県民が真にゆとりと潤いを実感できる心豊かな生活を実現する上で不可欠なものになっており、県民の文化芸術に対する関心や期待は、より一層高まっているようだ。また最近は、文化芸術の持つ、人々を引き付ける魅力や社会に与える影響力、文化芸術が人と人を結び、人々に元気を与え、地域の連帯感や一体感を醸成し、地域社会全体を活性化させて、魅力ある地域づくりを推進する力などが広く認められ、文化芸術の振興は、これまで以上に大きな意義を持っているという。

　そんな長野県の目指すべき方向性は、大きく次の３つである。

①個人のレベルアップ！県民一人ひとりの感性を磨く。

②地域のレベルアップ！地域の「文化力」を高め、長野県らしい文化を創る。

③県全体のレベルアップ！「文化力」を活用し、輝く長野県に。

　県民一人ひとりが感性を磨き、長野県ならではの文化芸術の発信をし、文化力を産業振興に生かすとともに、観光資源としても有効活用することで、「観光立県長野」の再興を担うという一連の流れを１０年計画で試みる。

また三重県では、「美（うま）し国おこし・三重」として、文化力を生かした自立・持続可能な地域づくりをめざす取り組みを行っている。これは、地域の多様な主体が、特色ある自然や歴史、文化などを活用して取り組む地域づくりを基本に、２００９年（平成２１年）から２０１４年（平成２６年）までの６年間にわたって、多彩な催しを展開することにより、地域の魅力や価値を向上させ、発信するとともに、集客交流の拡大をはかり、自立・持続可能な地域づくりへとつなげていく取り組みである。この取り組みを契機として、今後、三重県全域で、人と人、人と地域、人と自然の“絆”を深め、この地で暮らしたい、暮らし続けたい、訪れたいと感じることのできるような「美（うま）し国 三重」へとさらに磨きをかけていきたいとしている。

このように、他にも各県で同様の文化力向上の取り組みが行われている。どれも似たようで少しずつ違いをみせている。他県が始めれば我も我もと一斉に取り組みにかかる地方行政を見ていると、大人たちは、芸術の力（文化庁の言葉を借りて「文化力」）を高めれば、人々の感性は豊かになると信じきっていると言っても過言ではない。また、この文化力プロジェクトに乗っかり、どの地域も県民から地域へそして経済の発展を願っている。

　地方経済の課題には、人口減少や高齢化が挙げられる。次第に地域が衰退していき、そこに住む人々の元気も衰えていく。それは、年齢や体力だけでなく、精神的な部分からも人々の元気が失われていくのである。かつて中心市街地として栄えた地域が、郊外に進出した大型ショッピングモールの影響により衰退していくというのは、日本の各地域によって見られる光景である。郊外とはいえ、大型ショッピングモールにより、人々が集まる場所ができ、活性したように見えてもそれは問題が解消されたわけではない。ただ単に、お金から景気が良くなるだけでなく、そこに住む人々が元気になることが大切だ。失われつつある元気（誇り）を取り戻すことこそが、地域経済の向上における魅力であるのだ。そこで、芸術の持つ力を借りて、地域住民の文化力を高め、人々の心を豊かにするのである。芸術の力を使ったトリエンナーレなどの国際美術展は、経済効果に目を奪われがちであるが、文化力を高めることが第一なのだ。政策として人々の文化力を向上させることで、精神的な豊かさを築き、それにより地域の経済が上昇することが、芸術がもたらす力である。

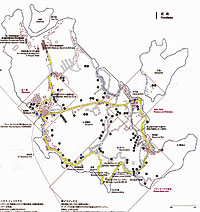
**３－２　地域住民と民間企業**

それぞれの地域で、アートはその地と調和しながら、人々に認められていく。まず、そこに住む住民の心をつかむことが大切である。心をつかむということは、芸術に対する理解を深めることが大切である。つまり、そこに住む人間自体の文化力を高めることがまずもって必要となる。

　香川県に直島という島がある。銅の製錬所・養殖業が盛んな、人口約3,000人の島であり、その多くが60歳以上で占めている。そのため、年々人口の減少は歯止めが利かない。そんな小さな島で、直島に魅せられたアーティストたちが思い思いの作品をこの地で製作したものが、島中に点在している。現代アートというのは、年齢問わず理解に苦しむ深い作品が多いと言っても過言ではない。そのようなアートが、高齢化した小さな島の住民に無抵抗で受け入れられることは、まずもってないだろう。島民と交流を図ると言っても、実際には苦情など怒られることがほとんどである。

　　戦後の直島の観光事業

　昭和後半期における直島の観光開発への動きは、第二次大戦後の荒廃した人心もようやく安定しつつあった昭和２６年、四国新聞社が企画した「讃岐百景」の一つに琴弾地海岸が選定されたことで、戦争により中断された「観光立村」への意欲が、再び胎動し始めた。

[](http://forum.inax.co.jp/renovation/forum/repo013-naoshima/image/int01_L.jpg)　民間でも観光事業への意欲が次第に高まりをみせ、昭和３５年には、町有の串山でバンガロー用地２０戸分の貸与を受けた正坂新平が、うち１０戸を完成して開業したのをはじめ、揚島の磯浜養魚場に近い大広木池畔に阿部数太が、客室７と２４畳の広間を持つホテルを建設した。また、３７年４月には、石井朋晴が泊ヶ浦で、和風の「直島ホテル」の営業をはじめた。しかし、これらの初期の民間観光施設は、不特定の来島者を対象とし、強力な集客力を持たないため、いずれも散発におわったのである。

　昭和３４年４月の選挙に初当選した三宅親連町長は、はじめて編成した３５年度当初予算の大綱説明の中で、５項の重点施策の一つに「自主的産業振興対策と観光事業の基礎確立」を掲げ、観光開発に積極的に取り組む姿勢を示した。その内容は、直島本島の北部については、既存の直島製錬所を核として関連諸産業のより一層の振興をはかり、町経済の基盤とし、中央部は、教育と文化の香り高い住民生活の場にする。そして、南部と周辺島嶼部の内海随一を誇る自然景観を、町の歴史的な文化遺産を保存しながら、これらを観光事業面に活用することで、町の産業の一つの柱にしたい、というのが三宅町長の構想であった。

　経済は、文化的な生活を営む支えとなるものであらねばならない、というのが三宅町長の信念であった。したがって、こうした見地から観光事業をみるとき、直島が、個々の利益追求のみを目的とした乱開発で、先進地によくある低俗な観光地になることは、民生上かえって大きいマイナスであり、直島の観光事業は何より町の主導による「清潔な観光」であることが期待された。

　昭和３５年の夏、町は積極的に臨海学校や青少年のキャンプ、各種団体の講習会などを誘致し、一応の成果をあげたが、その受け入れに提供したのは学校・役場支所など公共施設であり、この試みを通じて、総合的な開発計画に基づく大規模な施設整備の必要性が痛感された。しかし、巨額の資金を要するこうした事業は、貧弱な町の財政力では実現が不可能で、大資本を誘致するほかないことが再確認されたのである。

　直島を「清潔・健康・快適な観光地として総合的に開発し、さらに地元産業の育成に寄与できる大企業」というきびしい条件で開発をまかせられる相手を求めることは、単なる理想に過ぎないかとも考えられた。たまたま、町内に別荘をつくることで、三宅町長と個人的な縁故のあった清水雅東宝社長が、３５年４月に来町した際、この件について「非常にむずかしい条件だが、これをやる人があるとすれば、それは藤田観光社長の小川栄一をおいてない」という助言が得られたのである。

　３５年１０月３０日、小川社長を迎えて現地視察と町内関係者の協議が行われた。小川社長の観光事業に対する考え方は、「従来の金持ち独占の遊楽本位から、大衆のレクリエーションのための近代的観光産業へと発展させ、できるだけ大勢の人びとに、新鮮な食べ物と、立派な客室を安く提供し、大衆に一日王侯の気分で喜んでもらい、事業も収益をあげる。」というもので、町の開発基本方針にほぼ合致する内容であった。

　時代を先取りする鋭い感覚と、強引とさえいわれる実行力で「財界のブルドーザー」と評されるだけあり、小川氏の行動開始はすばやかった。翌年には用地買収に着手し、所有権移転登記を行った。観光開発成功に自信を持っていたことから、一部には保守的立場の者もあったが、大方はこの事業に大きい期待を寄せた。

　昭和３６年５月、小川氏は香川県庁で記者会見し、直島開発のための新会社設立と、その概要を説明した。小川氏の構想は、あくまで健全な勤労大衆の慰樂施設とし、優れた自然環境に適した施設計画を立て、藤田観光チェーンの瀬戸内海における一大拠点に位置付けるというものであった。新会社は「日本無人島株式会社」と名付け、直島の開発準備が着々と進展した。町民の強い要望に応え、昭和４１年７月１日に琴弾地で「フジタ無人島パラダイス」がオープンした。また、揚島養魚場でも、鯛の釣りと料理提供を始め、まだ養殖鯛の珍しい時期でもあり好評であった。客の大半は、同和鉱業系の地場として、集客力の大きい岡山方面と、町内の人たちであった。こうして、部分開業ではあったが、町民が貴重な土地と漁場を提供して誘致した「観光開発」の成功は間近い、という期待感にあふれた。

　昭和４１年のパラダイスの開業を機として、観光・観光開発は準備期から営業施設の建設期に移行した。しかし、大養魚場建設は、巨額の投資に対する採算性と固定施設が養殖に適さないという結論から実施が困難になった。また、ホテル建設については、大型船の接岸施設問題や、当時の国立公園特別地域に対するきびしい規制のため許可を得ることが出来ず、新たな開発を阻んだ。さらに、オイルショックのあおりをうけ、レジャー関連産業への投資意欲が後退し、建設資金が枯渇したことも開発を遅延させる要因となった。

　この時期は、企業倒産が相次いだ長期経済不況期にあたり、観光開発に対する町内の不信と批判も、パラダイスと揚島養魚場の直営を中止した昭和５２年前後に最高潮に達した。さらに、翌５３年１２月、事業の中心の小川氏が死去したのを機として、藤田観光系列から小川色が一掃されるに至って、無人島開発による直島の観光事業は事実上の中止・整理期に入り、ついに６２年９月末の会社解散で、２８年間におよんだ観光開発は、未完成のまま幕を閉じた。

　開発の行きづまりで直島を撤退するにあたり、日本無人島開発株式会社の安藤正社長は、「土地の処分については、地元の意向を尊重したい」として、町に譲渡先の斡旋を依頼した。その結果、幸い町の基本方針である「清潔で健康な開発」に適合する企業として、岡山市に本社がある株式会社福武書店を最有望候補にあげることができ、昭和６２年３月３１日、藤田観光・日本資源・日本無人島開発の３社と福武書店の間で所有地の一括譲渡契約が成立し、福武書店の直島進出が決定した。

芸術がもたらす力を、地方に求めるとはどういうことか。その答えに、ベネッセアートサイト直島代表の福武総一郎はこう答える。

　「現代美術の作品は、基本的にコピーできない。アーティストは儲からないのです。では、彼らは何故に作品をつくるのか？私は、現代社会の問題や課題や矛盾を、ひとつひとつの作品に込めているのだと思います。そんな作品を、問題や課題や矛盾の多い都会に置いたとしても、はたして作品みずから光を放つだろうか？」と。この、作品自体が輝くという力を魅せられるのは、地方ならではの力である。そこに目を付けたのが福武氏だ。

６３年８月、町議会に対して「直島開発計画」を説明した福武総一郎社長は、その目標を「人と文化を育てるリゾート・エリアとして創生」するものと要約し、それを「直島文化村構想」と総称した。この文化村構想は、「直島を単にレジャー、保養、あるいはスポーツのためのリゾート地ではなく、直島の海と山の両要素を持った豊かな自然環境を舞台として、その自然環境とマッチする諸施設、および運営により創出される「くつろぐ」という状況をベースに、芸術文化を基軸として、子どもたち、高齢者、芸術家、企業家など多次元で魅力的な人々の出会いによって萌芽する、人々の創造性を育てる場所にする」というものである。

　文化村構想による具体的な施設づくりは、１０年間の長期計画で、東の姫泊から西の揚島までの間に芸術村、園地、キャンプサイト、ホテル、マリーナなどの建設が考えられている。平成元年７月２０日には、琴弾地地区に「直島国際キャンプ場」がオープンし、さらに平成４年には、外国現代美術の代表的作家の作品が並ぶ美術館の中に宿泊する、といった感覚の「現代美術と出会えるホテル」が建設されるなど、念願の南部開発の施設づくりが着々と進行し、町の新しい経済基盤の確立と、文化的水準、さらには町のイメージの向上につながるものとして、大きい期待が寄せられた。

　その、「現代美術と出会えるホテル」というのが、安藤忠雄による設計のベネッセハウスミュージアムである。3つの宿泊棟には、それぞれの場所で、島の良さを実感できるようになっており、また、至るところに現代アートが存在する。島のアートを体感しに訪れ、アートの中で宿泊する。普通ではない美術館とホテルという組み合わせが、訪れた者の心をしっかりと掴むのである。それが直島なのである。

（写真説明：ベネッセハウス　オーバルは、ベネッセハウスミュージアムのさらに上の丘に立つ隠れ家のような建築である。全室から海が見え、中央の楕円形の池などで水のせせらぎが楽しめるようになっている。また、壁に絵が描かれた客室もある。）

そして平成９年に始まったのが、「家プロジェクト」である。これは、福武氏のコンセプトである「在るものを活かし、新しいものを創る」という考えを実行したものだ。日本人はしばしば、あるものを作っては壊しを繰り返す。住宅を例に、外国と比較してみると、外国人はずっと昔から建っている家に住んでは引っ越し、また別の人が入居し、古くなれば修理してまた住む、そしてまた引っ越すということを繰り返す。日本人には、そのような習慣はない。マイホームを建てるとなれば、まず土地を綺麗に整備して家を建て、半永久的にそこに住み続けるだろう。そしてまた、そこに住む人がいなくなれば、その家は取り壊され、新しいものが別の人によって築かれるのである。その象徴が東京であり、長い歴史があるはずなのに、経済が目的化してしまって、歴史の痕跡がないのである。古くからある集落の空き家を改修し、現代美術の作品に変えてしまおうという「家プロジェクト」は、そこに暮らす人々の営みにとって新しい発見、契機となり、かえって斬新なものへとなった。地域振興・活性化へと大きな実を結ぶ第一歩を進めた。

家プロジェクトの第１弾として完成したのが（写真下２枚）「角屋」である。約２００年前に建てられた家に、床に張られた水の中で１２５個のデジタルカウンターが明滅するという作品だ。１から９までを表示するカウンターの速さはそれぞれ島の人々が決め、作品づくりに参加した。家の内部は漆喰や焼板、本瓦で元の姿を復元した。このように、作品づくりに島民が参加することによって、作品を身近に感じることができるだろう。理解も深まりやすいかもしれない。

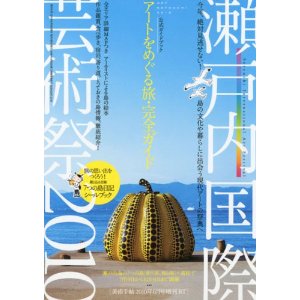
この「家プロジェクト」が進むにつれて次第に島民と仲良くなっていき、また、日本だけでなく世界中から訪れる人を見て、島民は次第に誇りをもつようになっていったのである。好きだの嫌いだの、個人の感性を自由にコミュニケーションできることがアートであり、島の孤独なお年寄りをアートという手段を使って元気にしていくことで、現代社会のストレスを緩和したのである。



（写真説明：石橋家は明治時代、製塩業で栄えた。直島では古くから製塩業が人々の生活を支えており、直島の歴史や文化をとらえるという観点からも、家そのものの再建に重点がおかれた。空間デザインには千住博や秋元雅史が、修復監修には福武総一郎や本多忠勝により手がけられた。）人が住んでいた頃の時間と記憶を織り込みながら、空間そのものが作品化されているというのが「家プロジェクト」であり、この写真のほかに全部で７軒の「家プロジェクト」が公開されている。

　「このプロジェクトによって、何よりもうれしく思ったのが、過疎化や高齢化により活力を失いつつあった島全体を活性化できたことだ。遠い外国からの来訪者を含め、多くの外部の人たちを島に呼び込み、若者たちをひきつけることができた。芸術文化は町づくりの力になり得る、この事実を再確認できたことがうれしい。」と安藤忠雄はいう。

　次に平成１６年に開館した地中美術館により、観光客は激増した。地中美術館とはその名の通り、建物は全て地中に埋まっている。そのために、外観がなく、風景としては造形物が見えない。外側から見ると、建築的ボリュームがほとんどないのである。また、訪れる人たちは、知らず知らず美術館の内と外を行き来し、アートと風景との関わり合いを楽しむことができるよう、まわりの自然と親和関係にあるようにつくられている。

[](http://www.shikoku-np.co.jp/kagawa_news/culture/photo.aspx?id=20101102000108&no=1)[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=12p0hdr8p/EXP=1322556583;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjUWxaLXN4ZnhSU3lXQ3FrVFNQSUVZeDhVeGFaRkZZMHNHWGk0bWZqTkJ5ZmRsY1FUQ0NlUXhZLVEEcAM1NENzNW9pNDVZYUY1WnU5NlpxYjZJcTQ2S0dUNTZXdARwb3MDMwRzZWMDc2h3BHNsawNyaQ--/*-http:/ec2.images-amazon.com/images/I/51lh3ax+RTL._SL500_AA300_.jpg)　そして平成２２年に瀬戸内国際芸術祭が開催された。直島だけでなく、瀬戸内海に浮かぶ島々がアートと深く関わり、その自然風景の美しさと現代アートがコラボレーションすることで新たなアートの聖地となった。直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港周辺を舞台に、7月19日から１０月３１日までの１０５日間にわたり開催された。それぞれの島で育まれてきた固有の民俗を活かし、島々で営まれてきた生活、歴史に焦点を当て、アートが関わることによって住民、特に島のお年寄りたちの元気を再生する機会を作り出していくことを目的ともされ、１８カ国７５組のアーティストが参加した。来場者数は、当初予想の３０万人の３倍を超える９３万８２４６人となった。その中でも、直島が２９万１７２８人で最多となった。モネの作品を収めた地中美術館などが人気の秘訣となったようだ。開幕直後の来場者数はそれほど多くなかったが、新聞や雑誌、テレビで取り上げられたことや、ネット上の口コミ効果が数字を押し上げたと分析される。

実行委の収支は収入７億９３００万円に対し、支出６億８９００万円で、黒字の約１億円は７千万円を１１年度に繰り越し、残り３千万円は継続展示している作品の改修や広報などに充てることが決まった。９、１０月の来場者アンケートの結果では、１万１４７６人から回答が得られ、芸術祭について「良い」から「良くない」の５段階で評価してもらったところ、作品については９割以上の人が好意的に受け止め、芸術祭の総合評価も「良い」「まあまあ良い」が計９０．７％を占めた。７６．２％が次回開催時に「来たい」と答えたという。一方、海上や島内の交通については「あまり良くない」「良くない」という否定的な意見が２０．２％あった。

　来場者の内訳は男性が約３割、女性が約７割で、１０～３０代が約７割を占めた。県外客は７１．３％で、日帰りが５１．３％、１泊が２０．２％、２泊は１７．６％など。宿泊先は高松５５．５％、小豆島１７．４％、直島５．３％、岡山１１．１％などだった。

島の住民アンケート（回答者５１３人）の結果も示された。開催後、約８８％が島に作品が設置されて「たいへん良かった」「まあまあ良かった」、約８２％が地域活性化に「大いに役立った」「少しは役立った」と回答。９３．８％が芸術祭を「大成功」「まあまあ成功」とし、３年後については８４．１％が「ぜひ開催してほしい」「どちらかといえば開催してほしい」と答えたという。

[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=13irdn62i/EXP=1322556972;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjUmppQUhJX1E1N3R2VzFmdVRPekVzbDB2VlVOVWY3WDBSS1U2M0FjdmMzVmgtOVIwQXcxOTFaRHcEcAM1NENzNW9pNDVZYUY1WnU5NlpxYjZJcTQ2S0dUNTZXdDQ0Q0E1YkdWNTZTNgRwb3MDMTU0BHNlYwNzaHcEc2xrA3Jp/*-http:/userdisk.webry.biglobe.ne.jp/013/069/35/N000/000/003/128481756268916130851_SN3J1660.JPG)[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=135a229rm/EXP=1322556376;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjVC1lRWVvZk1lWGpkMUhUN0FXYm5GNEVHS2VaOEEteHdwRDFobElVWW9JOFJ0Q2Jaa0FDUTJQRnJzYwRwAzU0Q3M1b2k0NVlhRjVadTk2WnFiNklxNDZLR1Q1Nld0NDRDQTZLR001WWlYBHBvcwM0NQRzZWMDc2h3BHNsawNyaQ--/*-http:/andromeda552.blog.so-net.ne.jp/_images/blog/_62c/andromeda552/10-10-08.jpg)

[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=13peer76b/EXP=1322556376;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjU1JaNzlqeG1TeTJ5LTZiaWhhNW5YVlZwMC0zOWRPd0pHZ0s0UVBxNl9lT0RHX1JNNGF3RDNoZHhGeARwAzU0Q3M1b2k0NVlhRjVadTk2WnFiNklxNDZLR1Q1Nld0NDRDQTZLR001WWlYBHBvcwM1NwRzZWMDc2h3BHNsawNyaQ--/*-http:/img.blogs.yahoo.co.jp/ybi/1/0b/ff/kazuhiko117/folder/1294340/img_1294340_61950019_1?1288168062)

芸術を用いた地域の経済は、まず、そこに住む人たちを元気にしていくことが最優先である。直島には、島民とアーティストがその地と一体となって芸術の島を作り上げ、元気にさせるという一丸したものが感じられる。地域住民が元気であるということ、その輝きこそが、訪れた人を自然と元気にしていく力があるのだ。つまり、地元住民の理解なくして、芸術での地域活性は、自然との調和よりも困難なのである。

[](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/SIG=12g8alv2k/EXP=1321351713;_ylc=X3IDMgRmc3QDMARpZHgDMARvaWQDQU5kOUdjVHFMZjRURExya2cwRVh2Rm01cUxZMGpSdmEwSEVCbmY4ZjhDLUNyQm5tRzRsYXlyZTlYcVRBazZ3BHADNTV1MDViTzJJT09CaS5PQnZPT0JvZU9DZ3ctLQRwb3MDMTkEc2VjA3NodwRzbGsDcmk-/*-http:/storage.kanshin.com/free/img_45/458243/k261287088.jpg)　これで、地域は活気を取り戻し、経済は良くなったかのように思われる。だが、民間企業にとってはどうだろうか。来場者数最多の直島は、安藤忠雄の手がけたホテルが４つ（全６５室）あるというのに、宿泊は５．３％であった。また、直島を訪れて、まず一番に出迎えてくれるのが、桟橋に置かれた草間弥生の「南瓜」という作品である。島を訪れた人が必ず立ち寄る人気スポットでもある。一つの作品見えるが、これは二部構成で、ヘタと実からなる。かつては、このヘタの部分が盗難されるということも起こった。資産一億と言われるこの作品の維持管理は大変なものだ。もちろんこの島にある作品は、「南瓜」だけではない。芸術作品の維持管理、運営は難しい。例えお客さんが９０万人訪れたとしても赤字であるというくらい、アートをビジネスとして成立させることは容易ではない。それでも、屋外作品の劣化による変化を楽しむというマニアックな客層もあるようだ。国際芸術祭などで初めて訪れたお客さんをいかにリピーターにするかということが課題である。お客さんに、アートをもっと知ってもらうというプログラムが求められる。そのためには、今後、来るたびに魅力あるものを提供し続けることが必要となるだろう。

　福武氏の言葉に「文化は経済に従属するのではなく、その逆でなければならない。」というのがある。文化が経済の牽引力にならないといけないということである。物事は経済では進んでいかない。進めるのは、人の「思い」である。このような福武氏の情熱と構想力が人を動かすのである。

**おわりに**

　芸術から見る地方の経済において、利潤の追求をまずもって考えてはいけないこともある。それが第３章の直島にみる地域経済の活性であり、島の人々の美意識が刺激されたこと、自分たちの町をきれいに見せようと努力し、自信と誇りの再発見につながったのではないだろうか。芸術にはこのような力をもたらす力があるのではないかと思う。

直島以外にも、風土に根差した町並みの中で調和したアートを展開することで、人々の注目を集めようと励む町がある。アートを楽しみながら町を散策でき、全国から訪れた人と温かな交流が生まれることで、町が明るくなったとその地の人は言う。固有の場所で展開されるアートや建築は、その場所へ人を惹きつける力を持つと言われるだけあり、芸術が地方経済の活性につながると考えられる。

芸術とはハコ（美術館）の中のものでも、額縁の中に納まったものでもない。見る者が芸術をつくるというデュシャンや、見る者を激しく引きつけ圧倒することこそ真の芸術とする岡本太郎の考えもあるように、様々なアーティストの作品に触れ、各々の考えを創造することに、芸術のもつ重要性が隠れている。十人十色の感性を恥じることなく、作品に対する意見を交換することで、人々との交流が生まれる。現実世界から少し離れた気分にさせてくれる芸術作品に触れることで、生き急ぐ現代社会の人間にゆとりを与えることができるのも芸術の持つ力である。この芸術が生んだ「ゆとり」こそ、人間の心の豊かさを形成するものへと繋がる。「心の豊かさ」を、行政は「文化力」というが、この文化力を高めることによって生まれる未知数の将来性には、計り知れないものがあると見込んでいるからこそ、国をあげて取り組むのである。日常と垣根をフラットにすることで、自然に人にアートが舞い込んで、成長していくと共に自分のものへとなっていってこそ、その人の育んだアートが誕生する。息詰まるような社会の中に、自分の中で芸術を育てていくことで、「ゆとり」に似た感性や豊かさが、魅力ある人間をつくる。そうして一人一人が浄化された心になった時、それらの人間の集まりこそ、目に見えない芸術作品の集大成だ。「町を活性させなければいけない」のではなく、活気ある人々の生きる場所は、活力溢れる地域へと生まれ変わる。

芸術がもたらす力が地方の経済効果をあげるというのは、文化力を高めた地域住民が元気を取り戻すことで、町が活性してゆくということである。そして次第に、訪れたアートファンや観光客の消費活動によって少しずつ地方の経済が良くなっていくということだ。この芸術と地域住民と地方経済のループを「芸術がもたらす地方の経済」という卒業論文で綴じたいと思う。

**参考文献**

直島町史編集委員会　「直島町史」　直島町役場

秋元雄史　安藤忠雄ほか　「直島　瀬戸内アートの楽園」　新潮社

Casa BRUTUS no.126　（株）マガジンハウス

OZ magazine no.416,447,460　スターツ出版

芸術新潮 2010.9　新潮社

文化庁「文化力」プロジェクト　http://www.bunka.go.jp/bunkaryoku\_project/index.html

岡本太郎　ウィキペディア

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B2%A1%E6%9C%AC%E5%A4%AA%E9%83%8E

明日の神話　再生プロジェクト　http://www.1101.com/asunoshinwa/asunoshinwa.html

マルセル・デュシャン　ウィキペディア

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%AB%E3%82%BB%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%87%E3%83%A5%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%B3

神戸ビエンナーレ　http://www.kobe-biennale.jp/

神戸ビエンナーレ　ウィキペディア

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E6%88%B8%E3%83%93%E3%82%A8%E3%83%B3%E3%83%8A%E3%83%BC%E3%83%AC

ベネッセアートサイト直島　http://www.benesse-artsite.jp/

直島町観光協会　http://www.naoshima.net/index.html

直島・家プロジェクトレポート

http://forum.inax.co.jp/renovation/forum/repo013-naoshima/report013.html